

第8章 逸脱行動の抑制要因

第1節 逸脱行動を抑制するもの

本調査では、法律で禁止されている逸脱行動を中心に、逸脱行動を抑止する「心のブレーキ」になるものは何か、逸脱行動の抑制要因とでも言うべきものを明らかにしようとした。その調査結果をまとめたのが表8-1である。

表8-1 逸脱行動をとめる心のブレーキになる要因(2つまで選択)

(%)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	タバコをすう	お酒やビールを飲む	無免許でバイクを運転する	他人の自転車を盗りにする	車のハンドルを握る	店の物を引き取る	お金の取り上げ	学校をわざと傷つける	人をぶついたりする
1. 悪いことだから	15.8	12.6	28.8	50.8	52.4	55.4	53.6	43.2	35.1
2. 「きまり」だから	6.9	13.3	20.7	8.4	8.8	6	11.1	3.5	5.7
3. 仲間はずれにされるから	0.1	0.5	0.2	0.3	0	0.3	0	0.4	0.3
4. 人からしろい目で見られるから	0.4	0.6	0.5	1.3	1.2	2.1	2.3	2.6	1.6
5. 相手に悪いから	1.5	0.9	2.1	27.7	8.3	29.8	4.9	40.4	0.4
6. 家族にめいわくをかけるから	4.4	3.5	15.2	10.5	18	11.2	8.9	9.5	10.4
7. 親におこられるから	3.7	4.7	3.3	2.2	3.3	1.4	1.8	1.8	0.8
8. 教師におこられるから	0.4	0.5	0.5	0.3	0.2	0.5	16.4	1.3	0
9. 警察につかまることがこわいから	2	3.4	30.7	18.1	26.4	13	1.7	4	7.4
10. 自分の将来に悪い影響を与えるから	16.9	7.9	8	5.2	8.8	7.3	4.4	4.8	23
11. 後悔するだろうから	11.1	4.5	9.3	16.2	18.6	17.6	14.7	21.2	22.9
12. 処分(停学・退学など)を受けるのがこわいから	5.1	4.8	10.3	3.1	6	4.4	11.3	5.3	2
13. 健康に悪いから	76.1	35.5	2.5	0.7	0.6	0.5	0.9	1	52.8
14. 1~13のなかにあてはまるものはない	8.8	14.1	16.8	9	7.4	8.8	13.7	10.3	7.3
15. やってもかまわない(心のブレーキになるものはない)	7.3	30.8	4.9	3	1.9	0.9	3	4	1.1

逸脱行動の分類はいくつか考えられようが、ここでは、その逸脱行動がなされた結果、他者の迷惑や被害を生じる項目とそうでない項目に分て考えてみたい。飲酒、喫煙、シンナー、バイクの無免許運転などは、自分にしか迷惑のかからない、つまり自己責任の範囲にとどまると考えられる逸脱行動であるとも考えられ、一方、万引き、恐喝、傷害などは、他者を巻き込み、被害者がでるという点で、飲酒、喫煙などとは異なった性格を持つ逸脱行動であると考えてよいであろう。(バイクの無免許運転は事故で他者をまきこむ危険があるが、本人たちは自覚していないと思われる。)

質問項目をこのような基準で分けると、自己責任の範囲にとどまると高校生が考えているであろう逸脱行動は、「たばこを吸う」(喫煙と略記、以下同様)「お酒やビールを飲む」(飲酒)「無免許で車やバイクを運転する」(無免許運転)「シンナーを吸う」(シンナー)である。

飲酒に関しては、30.8%の人が「やってかまわない」と回答しており、高校生の間では飲酒がやってはいけないことだという認識が薄れていることがわかる。

一方、第三者に迷惑を及ぼしたり、被害者が生む逸脱行為として、本調査で取り上げたのは「他人の自転車を勝手に使ったり、盗んだりする」(自転車盗)、「お店の品物を万引きする」(万引き)「人をおどしてお金やものを取り上げる」(恐喝)「学校のをわざとこわしたり傷つけたりする」(学校内器物破損)「人をなぐったり、けったりする」(傷害)などの非行である。

これらの非行に関しては、すべての行為について50%以上の多くの者が「悪いことだから」という点を挙げている。傷害に関しては、「相手に悪いから」を挙げた者が40%おり、自転車盗や恐喝に関しても「相手に悪いから」を挙げた者がともに30%近くいる。これらは、行為の結果や影響についての理解がなされていたり、罪悪感や影響力に対する洞察力が働くことによって、行動が抑制される面が強いということを示すものともいえる。

それらの非行に対して、喫煙、飲酒、無免許運転、シンナーに関しては、「悪いことだから」と考える者の比率はやや低くなる。「悪いことだから」を挙げている者の比率は、喫煙15.8%、飲酒12.6%、無免許運転28.8%、シンナー35.1%であった。さらに喫煙、飲酒、シンナーに関しては、「健康に悪い」という自分自身の身体への配慮が逸脱行動を抑制する要因になっていることがわかる。「健康に悪いから」と回答した者の割合は、喫煙(76.1%)、飲酒(35.5%)、シンナー(52.8%)であった。こういった逸脱行動に関しては、高校生には罪悪感の希薄化がみられ、行動の結果について自分自身が責任をとればすむことだと考えているのではないかと推察される。

「警察につかまるがこわい」、「家族に迷惑をかける」、「親におこられる」、「教師におこられる」、「処分(退学、停学など)を受けるのがこわいから」という抑制理由に関しては、それらを「心のブレーキになるもの」とした高校生の割合は低かった。ただし、無免許運転(30.7%)、万引き(26.4%)に関しては「警察につかまるがこわい」を挙げる者の比率は例外的に高かった。家族に関するブレーキ要因としては、「家族に迷惑をかける」を挙げた人の比率は、喫煙、飲酒の場合は5%以下であったが、それ以外の逸脱行動では10%から18%の割合を占めており、あまり高い比率とはいえないが、幾分かは逸脱行動を抑制する要因として機能しているといえる。

しかし、学校に関する要因、具体的には「教師におこられる」、「処分(退学、停学な

ど)を受けるのがこわいから」は、学校の器物破損や無免許運転などではやや抑制要因として機能している面もあるが、その他の逸脱行動に関しては、ほとんど機能しているとはいえない。高校生にとって、逸脱行動をした結果、学校から受けるであろう処罰やそれに伴う不利益は、行為の結果に対して配慮すべき要因としてあまり重視されていないということかも知れない。

友人関係に関しては、「仲間はずれにされる」ことや「人からしろい目で見られる」といったことは、高校生の逸脱行動を抑制する心のブレーキにはまったくなくなっていないことがわかる。次節に明らかのように、非行に走る原因が「友人(仲間)」にあると考えている高校生が15%おり、この比率は逸脱度が大きいほど高い(図8-1)ことを考慮すると、友人関係は非行の抑制要因として働くのではなく、むしろ逆に逸脱行動を促進する要因として機能している面が強いように思われる。

以上のことから、高校生の逸脱行動にブレーキをかける要因として、学校や友人、さらには家庭や家族もそれほど強い抑制力を持っているとはいえ、それらの絆としての弱さが浮き彫りにされた。本調査からは、逸脱行動を抑制するのは、その行動が悪いことであるという意識を本人自身が持っているかどうか、その行為が相手に悪いと思えるかどうか、また、それが自分の健康にとって悪い影響があるかと思うかどうか、といったことであるという結果が明らかになった。なお、規範意識の形成過程での家庭や学校の果たす役割については、別の考察が必要とされるであろう。

第2節 非行原因についての高校生の見方

青少年が非行に走る原因は何であるかを質問したのが、図8-1である。この質問は、高校生自身が現在、逸脱行動や非行をしているかどうかに関係なく、非行の原因は一般的に何に原因があるかを尋ねたものである。(図8-1)

非行原因に関する高校生の見方は、全体的傾向として、自分自身に原因があるとする者は36.8%、家庭に原因があるとする者は33.5%でほぼ同じであった。友だち・仲間に原因があるとする者は15.7%であった。

また逸脱度との関係では、どの原因を多く挙げているかは、逸脱度によってやや異なっている。逸脱大群は他の群に比べて、本人自身に原因があるかと思う者の比率が明らかに高く、友だち・仲間を原因としている者の比率もやや高い。逸脱度が大きい高校生の場合、自分が逸脱行動をしている原因が家庭や親、あるいは友人・仲間にあるかと思う者よりも、自分自身に原因があると自覚している者が多いという結果が明らかになった。一方、家庭(親)が非行原因だとする者は、非逸脱群で最も高く、逸脱度が高い者ほど低い傾向が見られる。

では、規範意識の高さと青少年が非行に走る原因は何にあるかとの関係をみてみよう。(図8-2)ここでは、図に示されているように、非行に走るのは「自分自身が悪い」と見ている者の割合が低規範群でもっとも高く、高規範群で最も低いことがわかる。家庭(親)に原因があるかと思う者の割合は、高規範群で最も高いということが明らかになった。

図8-1 逸脱度別にみた非行に走る原因(%)

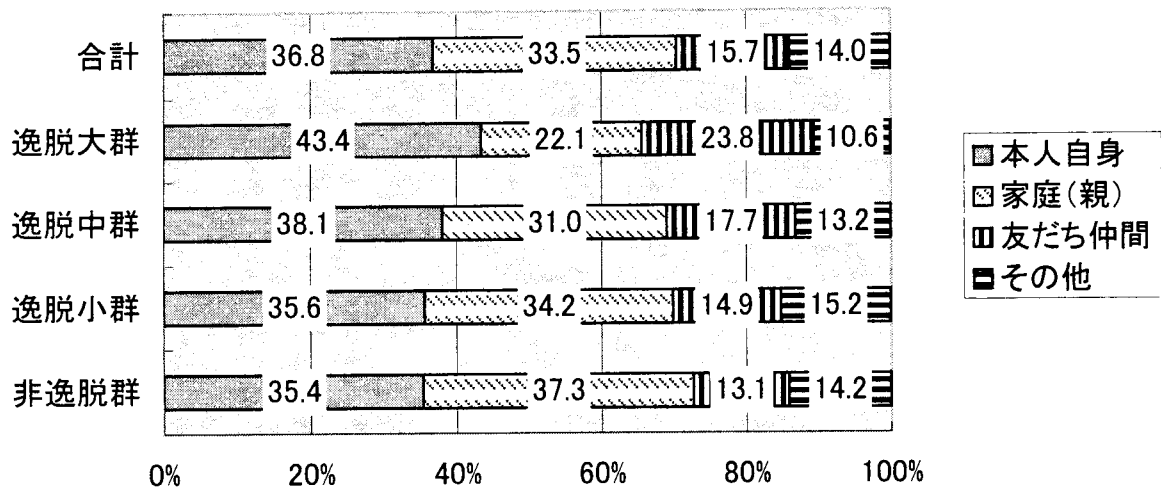
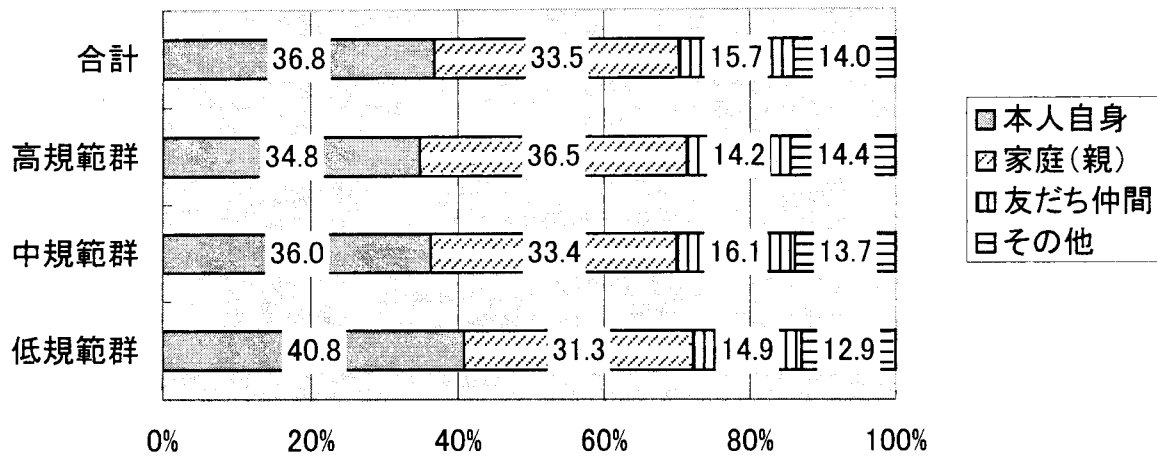


図8-2 規範意識群別にみた非行に走る原因(%)



第3節 まとめ

逸脱を抑制する要因について、およそ以下のことが明らかになった。教師からの叱責や退学や停学などの学校生活に関する不利益や家族に迷惑をかけるなどは、ほとんどの高校生にとって、逸脱行動を抑制する要因になっているとはいえない。

逸脱行動に関して、飲酒、喫煙、シンナー、バイクの無免許運転など自己責任の範囲にとどまると考えられる逸脱行動と、万引き、恐喝、傷害のように他者を巻き込み、被害者が生まれる逸脱行動との二つに分けると、後者の逸脱行動に関しては、「悪いこと」であり、「相手(被害者)にも悪い」という意識が抑制要因となっている。それに対して、前者の自分の自己責任の範囲でおこなう逸脱行動と考えられる項目に関しては、罪悪感希薄化しており、「健康に悪い」など、自分自身の利益に関する理由を挙げる者が多く、人に迷惑をかけないと考えられる逸脱行動に関しては、自分の勝手でおこなってもかまわな

いという意識が高校生の中で広がっているように思われる。

また、非行に走る原因として高校生が考えるのは、本人自身、家庭（親）が約 35%でほぼ同じで、友だち・仲間は約 15%であった。高校生が非行の原因と考える回答項目と逸脱度の大小と規範意識の高低には関係がみられた。逸脱度が大きいほど、本人自身に原因があるとする者の割合が高くなり、規範意識が低いほど、同様に非行の原因を本人自身にあるとする者の割合が高い。これは、逸脱度が大きい高校生、そして規範意識の低い高校生は、自分が逸脱行動の原因を家庭（親）、あるいは友人・仲間にあると考える者よりも、自分自身に原因があると自覚している者が多いということであろう。

高校生にとって、家族、学校、友人は、自分自身の行動を決定するうえで、また規範意識の形成の面からもどういう意味を持っているのであろうか。さらなる研究が必要であると思われる。

